

## 説経の思想——「をぐり」をめぐって——

伊藤 由希子（教育学科）

## 要旨

本研究は、説経の代表的作品のひとつ、「をぐり」をテキスト内在的に読解することで、主人公の小栗と照手がなぜ最終的に神として祀られるのか、そしてそこにあるひとびとの世界観を明らかにしようとするものである。様々な点で型破りな小栗は、だからこそ神仏の世界とひとびとをつなぐことができる存在であり、その小栗が人間の世界に十全に位置づくことによって、ひとびとは神仏とのたしかな和合や繁栄を信じることができるのである。

キーワード 説経、「をぐり」、神、仏

## はじめに

本論考は、中世から近世初期にかけ、主に大道の語り芸として興隆した芸能である説経の代表的作品のひとつ、「をぐり」についての考察である。

「をぐり」に関する先行研究は少なくないが、それらは方法論の上で三つに大別することができるように思われる。第一は「をぐり」成立の背景を歴史的に探った研究であり、和辻哲郎に代表されるような、いくつかの底本の比較や、「をぐり」に関係すると考えられる他テキストとの比較を主とする国文学的研究<sup>1)</sup>、あるいは、もとは「幽霊の前身」であっ

たはずの「餓鬼」が、「をぐり」においては「餓鬼阿弥」と呼ばれ、その蘇生が語られることになった事情を論じた、折口信夫の民俗学的研究<sup>2)</sup>などである。第二は、これら国文学的・民俗学的研究をふまえて、関連文献・材料を縦横に駆使し、説経全体に通底する「生涯」という概念に収斂させるかたちで「をぐり」を読み解こうとする西田耕<sup>3)</sup>や、本話に中世末期の遊行漂泊民の理想と精神構造を見て取る岩崎武夫<sup>4)</sup>のような、テキストの総合的理解を目指した研究、そして第三は、定住―漂泊、中心―周縁といった既成の概念図式に「をぐり」テキスト内の諸要素を当てはめて構造分析を行うことでその物語世界のありようを明らかにしようとする、鳥居明雄<sup>5)</sup>や村上隆<sup>6)</sup>の研究である。

本論考は「をぐり」に見られる倫理想象研究を目的としたもので、第二、第三の研究に連なるものである。が、先に挙げた諸論考が、「をぐり」テキスト内の諸要素を、時代や思想背景に関する一般的理解や既成の概念図式に当てはめていくという作業を行っているのに対し、ここではそのような図式や背景、宗教用語等の一般的理解等を持ちこむことができるかぎり控え、テキスト内在的に「をぐり」に内包された思想を探っていきたい（その理由の一端については、次節で論じる）。

説経がさまざまな歴史的・思想的（特に仏教等の宗教的）背景を持つものであることはいうまでもないが、それが町辻などで民衆相手に語られた芸能としての側面を持ち、また、一種の娯楽としてひとびとに享受されていたことを考えれば、「をぐり」がひとつの独立した作品として、

ひとびとに何を伝えようとしていたか、そしてひとびとがそこから何を受け取ったのかをテキストに即して考えていくことで、「をぐり」に新たな光を当てることが出来るであろう。

## 一

鞍馬の毘沙門の申し子として二条大納言兼家の家に生まれた小栗は、美しさ・賢さともに群を抜いた青年であった。しかし妻をもらう段になると、彼はその「不調」ゆえに、七十二人もの妻を送り返す。定まった妻を望んだ小栗は鞍馬へ参ったが、それを見た深泥池の大蛇が美しい姫に姿を変えて小栗の前にあらわれ、小栗はこの姫を「鞍馬の利生」、つまり仏が自分に与えてくれたものだと言ひ、契りを結ぶ。しかし小栗の相手が実は大蛇であるという噂が広まり、父の「いかに我が子の小栗なればとて、心不調なものは、都の安堵にかなふまじ」という判断により小栗は常陸へと流される。

小栗は大蛇を毘沙門に授けられた妻だと信じこみ、疑いや躊躇を見せない。このように、自分の判断に対してまったく疑いをはさまないことが、前半部の小栗の特徴のひとつである。この後、旅商人の後藤左衛門に照手姫を紹介されたときも、小栗は話を聞いただけですぐに照手に手紙を書き、相手が返事をくれるとそれだけで婿入りを強行するが、そこにも思慮や躊躇は感じられない。このような点が、前半部の小栗を、奔放で、考えるよりも即行動を起こすような人物として印象づけ、一面ではそれが前半部の小栗を魅力的に見せてもいる。

このような小栗の性質は、彼が申し子であるということにも由来しているであろう。しかし、神由来と考えられる彼の性情は、むしろ好ましくない結果へとつながっていている。大蛇と通じたことは父からも「心不調」とされて、都から流され、また、この後の照手への婿入りの強行も、照手の父である横山殿の怒りを買ひ、小栗は殺されることになる。

だが、強行な婿入りはともかく、大蛇と通じたということが、なぜ小栗が罪人のように流される理由となるのか。このことを、前掲の鳥居・村上の両論文で使用されていた〈内部〉—〈外部〉図式をいったん用いて考えてみよう。

この〈内部〉—〈外部〉図式によれば、化け物である大蛇は、人間という〈内部〉に対し、〈外部〉のものということになり、したがって、〈外部〉と通じることは〈内部〉からの逸脱ということになる。〈内部〉と〈外部〉は対立し、決して相容れないものであって、なぜ〈外部〉と通じてはならないかということは、そもそも問題となりえない。

さらにこの〈内部〉—〈外部〉図式は、都の内と外という区別に対応することであり、〈外部〉とは、都などの共同体の秩序によって支えられている場

ところで、小栗が大蛇と通じていることが露見する場面は、

都のわらんべ漏れ聞いて、二条の屋形の小栗と、深泥池の大蛇と、  
夜な夜な通ひ、契りをこむるとの風聞なり

と描かれていた。つまりこの情報は「都のわらんべ」によってもたらされたというのである。

子どもは、大人たちとともに生活し、社会の一部を構成してはいるが、公のいとなみに参加するだけの条件はまだ整っていないとされる、社会の準構成員である。社会の一部として位置づけられてはいるものの、社会の秩序では完全には処理しきれないような微妙な位置にいる者ということである。

そのような「都のわらんべ」によって都のひとびとにもたらされた小栗と大蛇の情報であるが、これは大人たちにとっては、いわば〈外部〉たる事柄であり、確かめようがないことである。しかし、にもかかわらず、ここで大人たちは、それを子どもたちの戯れ言として一蹴せず、大

事な情報として受けとめている。

以上のことは、「をぐり」を〈内部〉—〈外部〉という二項対立図式で理解することの難しさを示しているだろう。「都のわらんべ」は、大人たちが知るよしのないこと——いわば〈外部〉に通じる存在であると同時に、あくまで「都のわらんべ」という〈内部〉の存在でもある。そして、大人たちが、そのような子どもたちからもたらされた情報を、確かめようがないままに受けとめているということは、都が、未知・不可知なるもの——〈外部〉——をその内に抱えこんだ場としてあるということであらわしている。

そもそも小栗は、神の申し子という、いわば〈外部〉由来の生まれであり、もしその〈外部〉性が小栗追放の理由というのであれば、彼はもっと早い段階で排除されていなければならない。しかし、彼の〈外部〉性は、はじめは抜群の美しさ・賢さとして顕在化し、それは都の秩序の中でも賞賛され、小栗は〈内部〉に位置づくものと考えられていたのである。そして小栗は、たとえ申し子であろうとも、父にとっては「我が子の小栗」であった。しかし、大蛇と通じるということは、小栗はどうもそこから大きく逸脱しているらしい——。それがわかったときはじめて、小栗が排除の対象となる可能性が生じてくるのである。

神や仏といった超越的存在は、ひとびとにとってどこまでも未知・不可知なるものであり、まさに〈外部〉というべきものである。しかし、ひとびとはその自分たちを超越した大いなる力の恩恵にあずかることを願い、それらが自分たちの近くにあることを歓迎し、尊崇する。鞍馬・毘沙門の申し子であり、尋常ではない美しさ・賢さを兼ね備えた幼時の小栗は、そのようなひとびとの尊崇・憧憬の思いを一身に受けた、〈内部〉の内に位置づけられた〈外部〉だったのだろう。

しかし、元服後の妻嫌いや大蛇との契りは、申し子としての小栗の〈外部〉性が、そもそも都の秩序の中に安定して位置づくようなものではないことを、ひとびとにあらためて認識させる。

小栗が大蛇と通じているらしいことを知った父・二条大納言は、「心不調な者は、都の安堵にかなふまじ」と言って彼を流刑にするが、ここで大納言が、「都の安堵にかなはず」ではなく、「かなふまじ」という曖昧な表現をしていることは、小栗の〈外部〉性——ここでは、大蛇と通じること——をいかに捉えるべきかがわからないという、都のひとびとの〈知〉の限界を示している。

都とは、そこに暮らすひとびとからすれば、自分たちの〈知〉が行き届いているはずの空間である。ひとびとが安心して生きることができているのは、都における出来事やものごとの何たるか、そしてそこにある規則性や秩序を自分たちが基本的に了解していることを、当然のこととして前提にしているからである。そのような都の中だからこそ、ひとびとは様々な出来事にいちいち不安を感じたり、恐怖を覚えたりすることなく、日々の生活を送っていくことができるのである。

むろん、ひとびとが尊崇する神仏は、人間にとってどこでも畏怖すべきもの、〈外部〉たるものではあるが、都のひとびとは、それらを祀り、敬うことで、都の秩序の内に取りこんでいる。あるいは、ときに都に大きな蛇が現れるようなこともあるが、それは少し恐ろしい「大きな蛇の出現」というだけのことで、つまり、都のひとびとの〈知〉の範囲内の出来事であって、ひとびとの生活を根幹から脅かすことはない。

しかし、自分たちと同じように都に位置づいているはずだった毘沙門の申し子・小栗が蛇と通じたというのは、ひとびとの理解——〈知〉——を超えており、その善し悪しをどう考えればいいのかさえもわからないような出来事である。そしてこのことは、都という場が、実は未知・不可知なるものを抱えこんでいること、自分たちにとって確かなものではないことをひとびとにあらためて認識させる、つまりはひとびとの足を揺るがすような出来事なのである。

そうであれば、都の秩序を守り、ひとびとの安寧を取りもどすためには、そのような、都の〈知〉で捉えきれないものをもたらした張本人で

ある小栗を排除するしかない。「心不調な者は、都の安堵、にかなふまじ」という父の言葉は、小栗は明らかに罪人であるというわけではないが、「都の安堵」のためには彼を追放するしかないという都の論理を物語っている。

小栗は、申し子であることに象徴されるようなその存在の〈外部〉性ゆえに排除されたのではなかった。その〈外部〉性は、物語前半部ではむしろ彼の魅力ともなっていたのであり、「不調」とされた行動・性質が都の秩序を脅かすと考えられたときにはじめて、小栗は排除の対象となったのである。

以上確認したように、「をぐり」は、既存の概念図式や一般的思想理解のみではすくいあげることができないものを内包している。それらを見ていくためにも、以下、本話の具体相の検討をさらに進めていこう。

## 二

常陸に流された小栗は、常陸の侍たちから「あの小栗と申すは、天よりも降り人の子孫」と尊崇され、彼らの希望により大将にまでなる。そのような折、後藤左衛門という諸国遍歴の旅商人が小栗のもとを訪れ、武蔵・相模の横山殿の娘、照手姫の存在を伝える。照手に関する情報を得た小栗はたちまち気に入り、後藤に言われた通りに手紙を書き、後藤に託す。後藤は照手に仕える女房たちをだまし、この手紙が照手の手に渡るようにした。照手ははじめ拒絶したものの、後藤の脅しにより返事を書き、これを受け取った小栗は、後藤の案内のもと、横山家の了承を得ぬままに婿入りする。

この婿入りの件でも目につくのは、前節で見たような小栗の決断の速さである。小栗は後藤左衛門から照手の話を聞いただけで気に入り、後藤に仲人を頼んでいきなり恋文を出す。その返事が返ってくるなり、「一家一門は知ろうと知るまいと、姫の領掌こそ肝要なれ。はや婿入りせん」とはやり、周りが「上方に変わり、奥方には、一門知らぬその中へ、

婿には取らぬと申するに、今一度一門の御中へ、使者を御立て候へや」と進言したにもかかわらず、「なに大剛の者が、使者まであるべき」とまったく聞く耳を持たない。そして十人の屈強な殿原たちと強引に横山殿の屋形内の照手のもとへと婿入りするのであるが、このことが横山殿の怒りを買ひ、小栗の死へとつながっていく。前節同様、小栗の迷いのない判断は悪い結果をもたらすことになるのである。

もう一点気になるのは、その後、小栗の大蛇に対する思いがまったく触れられていないことである。小栗は大蛇を「これこそ鞍馬の利生」と信じこみ契りを結んだにもかかわらず、そのようなことなどまるでなかったかのよう、後藤に話を聞いただけの照手に夢中になっている。

さらには、一連の記述では、流刑となったことについての小栗の苦悩もまったく描かれない。つまり小栗には、みずからの行動に対する思慮や躊躇だけでなく、また反省も、ほぼ見られないのである。七十二人の妻嫌いも、小栗が反省なく、同じことを何度もくりかえしたことによるのである。

これらのことからわかるのは、小栗には、周りのものを思いやったり尊重したりする気持ちが欠如していたであろうことである。七十二人の妻嫌いでは、小栗は、ただ気に入らないからと、適当に理由をつけて妻を帰していた。大蛇に対しても、自分と別れた後のことを案じたりはしない。また、婿入りの強行も、横山家の反応を考えれば照手に迷惑をかけることになろうが、それも考慮しようとはしないし、その際の周囲の忠告にも耳を傾けることはない。後に横山殿が小栗殺しをたくらんだ酒宴への出席を照手が止めたときも、小栗は照手の意見を聞くことはなかった。このように自分の行動に対する思慮も反省もなく、他人への配慮もないことは小栗の奔放な魅力として映ることもあるが、ときとして「不調」とされたり、横山殿の怒りを買ったり、そして遂には死に至ったりという結果を引き起こすのである。

このように傍若無人な小栗に対し、照手は深窓の令嬢然として登場す



る。照手は日光山の照る日月の申し子であり、申し子という特性を小栗と共有している。照手も知性に優れており、女房たちが「これはただ心狂気、狂乱の者か、筋道にないことを書いたよ」と笑いものにしてきた小栗からの手紙を見事に読み解いてみせる。その恋文が自分宛だとわかるとそれを破いてしまうが、「あら恐ろしいの照手の姫の、後の業はなにとなるべき」という後藤の脅しを鵜呑みにし、小栗に返事を書く。

人の言うことを聞かず、周りのことを気にしない小栗とは対照的に、照手は周囲に左右されやすく、ほとんど自己主張をしないという印象を与える。この後小栗が死ぬまでに照手が登場するのは、小栗に横山殿主宰の酒宴への出席をやめるように進言する場面だけで、その存在感は極めて薄い。後に鬼兄弟に殺されそうになる場面や、漁夫の太夫のところへ姥によって燻されたときも、照手はひたすら受け身であり、積極性や主体性のようなものはほとんど感じられない。

照手は静、小栗は動という対照的な印象を与えるものの、いわば小栗と照手は、両者とも、周りのひとびとの関係を、十全に生きることができていないのである。

ここで、小栗と照手を結びつけた後藤について簡単に触れておこう。後藤の重要性は、ただの旅商人としてではなく、後藤左衛門という固有名がわざわざ出され、「高麗ではかめかへの後藤、都では三条室町の後藤。相模の後藤とはそれがしなり。後藤名字の付いたる者、三人ならではござない」と、その固有性が強調されている点からもわかる。

小栗と照手は、最終的には「物によくよくとふれば、神ならば結ぶの神、仏ならば愛染明王・釈迦大悲、天にあらば比翼の鳥、偕老同穴の語らひも縁浅からじ」というほどに深く結ばれるが、しかし照手は小栗からの恋文を一度は破いて捨てており、そのままであったなら二人は出逢うこともなかったはずである。それを軌道修正したのは後藤の脅しであった。

照手や女房たちに小栗の手紙の使いをしていたことがばれ、番人を呼

ばれそうになった後藤は「すは仕出した、とは思へども、夫の心と内裏の柱は大きくても太かれ、と申すたとへのごさあるに、成らぬまでも脅いてみばやと思ひつつ、連尺つかんで、白州に投げ、その身は広縁に踊り上がり、板踏み鳴らし、観経を引いて脅されたり」という行動に出る。観経を引いた後藤のもっともらしい脅しを真に受けた照手は小栗に返事を書き、後藤の目論見は成功するが、その脅しは正當なものというよりは、「成らぬまでも脅いてみばや」という程度のものであり、そのような後藤の口からの出まかせの脅しによって、小栗と照手は結ばれるのである。

他にも、後藤はさまざまな嘘やだましを駆使して二人を結びつけるのだが、それはひとえに「金百両に、巻絹百疋、奥駒を相添へて」という報償のためである。つまり後藤にとって重要なのは自分の言動の正しさではなく、どうすれば褒美がもらえるかということであって、そこには善への志向とでもいべきものが欠けている。

そして、このように目先のことだけ考え、善への志向が欠けている後藤左衛門を通じて結ばれたということが、前半部の小栗と照手のあり方や関係を象徴している。上述したように、小栗も照手も周りのものとの関係を十全に生きることができておらず、そもそも、二人の関係も相手のことをきちんと考慮するようなものではない。小栗も照手も、きちんとした考えのもと、自分でこの善し悪しを判断して動いていくということがないのである。

後藤左衛門に象徴される、前半部の小栗と照手のこのようなあり方を象徴するもう一人の人物が、照手の兄である、横山家の三男、三郎である。

小栗の強行な婿入りに腹を立てた横山は小栗を討とうとするが、これに対する長男家継と三郎の態度は対照的なものであった。

家継は、「烏帽子の招きを地に着けて、涙をこぼいて」、次のように父に進言する。

これはたとへではござないが、鴨は寒じて水に入る、鶏寒うて木へ登る。人は滅べうとて、まへなひ心が猛うなる。油火は消えんとて、なほも光が増すとかの。あの小栗と申するは、天よりも降り人の子孫なれば、力は八十五人の力、荒馬乗って名人なれば、それに劣らぬ十人の殿原たちは、さて異国の魔王の如くなり。武蔵・相模七千余騎を催して、小栗討たうとなさると、たやすう討つべきやうもなし。あはれ父横山殿様は、御存知ない由で、婿にも御取りあれがなの。それをいかにと申するに、父横山殿様の、いづくへなりとも、御陣立ちとあらんその折は、よき弓矢の方人でござないか。

家継は、はじめのことわざで自分も本心では小栗を婿として認めたくないことを断った上で、小栗の力、家のこと、父のこと等さまさまなことを考えての、苦渋の進言であると言う。

しかし、はじめから小栗討ちを決めている横山は聞く耳を持たず、家継に腹を立てる。この様子を見た三郎は、「父御の目の色を見申し」て、「道理かなや父御様」と、父の気に入るような小栗討ちの手段（鬼鹿毛という暴れ馬に小栗を喰わせる）を提案する。この提案は父を喜ばせたが、三郎は家継のように父横山のことを思ってこのように提案したわけではない。彼にあるのは、「父御の目の色を見申し」す、つまり父に気に入られようという意図だけである。三郎が、小栗を討ちたいと本心から望んでいるわけではないことは、小栗が鬼鹿毛を見事に乗りこなしてみせたときに、「三男の三郎は、余りのことの面白さに、十二格の登り梯を取り出だし、主殿の屋端へ差し掛けて、腰の御扇にて、これへこれへと賞翫ある」ことから明らかである。三郎の目的は父に気に入られることであって、小栗を討つこと自体ではないため、小栗殺しに失敗してもさして気にせず、小栗の曲乗りを楽しめるのである。

さて、鬼鹿毛による小栗の殺害失敗後、三郎は毒酒による小栗殺害を

横山に提案する。今回も三郎の提案は父を喜ばせたが、小栗は酒席への出席をなかなか了承せず、七度目の使いに三郎の使いが出ると、「御出仕申すまいとは思へども、三郎殿のお使ひ、何よりもつて祝着なり。御出仕申そう」とようやく受け入れる。他の誰でもなく三郎の使いによって、小栗は酒席への出席を決め、死へと進んでいく。

このように、後藤左衛門同様、三郎もまた、前半部において小栗の運命を決定づける重要人物である。そして三郎も、父横山の気に入られるという目先の目標を志向し、家継のように、今何が最良の選択かを真剣に考えることはない。目先のものだけしか見ず、周囲の状況や他人のことを考慮に入れないような善への志向の欠如が、後藤や三郎には象徴されている。

そして、そのような二人によって運命を大きく左右された前半部の小栗と照手も、周りのひとびとの関係を、自分の意志をもって、十分に生きることはできていないのである。

### 三

毒酒を盛られ、結局死ぬことになる小栗ではあるが、その前には、人喰い馬・鬼鹿毛に小栗を食わせようという横山の狙いに反し、鬼鹿毛を手なづけて見事に乗りこなすことで、その非凡を遺憾なく披露していた。

この鬼鹿毛に対したときの、小栗と十人の殿原たちとの態度は対照的である。十人の殿原たちは力づくでも鬼鹿毛に乗ることを小栗に勧め、もし小栗を食べようとしたら自分たちが鬼鹿毛を殺そうと息巻く。しかし小栗は、「あのやうな大剛の馬は、ただ力業では乗られぬ」と殿原たちの意見を排し、「馬に宣命を含めたまふ」という行動に出るのだが、「力業では乗られぬ」と小栗が考えたこの馬の「大剛」というあり方は、どのようなものなのか。

実は、「大剛」は主に小栗の性質を表す言葉として、物語全体を通し

てしばしば使用されている。物語の前半部では、照手の押し入り婿となろうとしていた小栗の「なに大剛の者が、使者まであるべき」という発言や、横山の「一門知らぬその中へ、押し入りて婿入りしたる大剛の者を、武蔵・相模七千余騎を催して、小栗討たん」という言葉に端的に示されているように、小栗の肉体的な力や武力の強さを表す言葉として、「大剛」は使われていると見ることが出来る。

しかし物語が展開するにつれ、「大剛」という言葉はこのような理解では捉えきれなくなってくる。

小栗は毒を盛られていったんは死に、その後餓鬼阿弥の姿でこの世によみがえるが、湯ノ峰温泉に浸かって元の体にもどった小栗を見た熊野の権現は「あのやうな大剛の者に、金剛杖を買はずは、末世の衆生に買ふ者はあるまい」と言い、みかども、「たれと申すども、小栗ほど大剛の者はよもあらじ」と言つて所領を与える。

ここでの「大剛」も、肉体的な力や武力の強さの表現ととることもできようが、そうすると、その以前からその「大剛」によって知られていた小栗が、ここになってはじめて、権現やみかどという権威ある存在から認められるようになる理由がわからない。小栗の肉体や武力は、横山の長男家継が、「あの小栗と申するは、天よりも降り人の子孫なれば、力は八十五人の力、荒馬乗つて名人」と言うほどにもともと強かったのであるから、もっと早い時点で認められてもよかつたはずであるし、小栗が地獄から再生した後に、肉体的にさらに強靱になったということを感じさせる記述も見受けられない。よって、同じ「大剛」という言葉を使用している、それが意味するところは、当初の肉体的強さや武力の強さに主眼をおいたものから変化してきていると思われるのである。

ここで鬼鹿毛に話をもどせば、小栗は鬼鹿毛が「大剛の馬」であるがゆえに、「力業で」乗りこなすのではなく、「宣命を含めたまふ」、つまり、力ではなく、言葉で言い含めるという。

そして小栗が鬼鹿毛にかけたのは、このような言葉である。

やあ、いかに鬼鹿毛よ。なんぢも生ある物ならば、耳を振り立て、よきに聞け。余なる馬と申するは、常の馬屋につながれて、人の食まする餌を食うで、さて人に従へば、尊い思案してらよ、さて門外につながれて、経念仏を聴聞し、後生大事とたしなむに、さてもんぞや鬼鹿毛は、人秣を食むと、聞かからは、それは畜生の中での鬼ぞかし。人も生あるものなれば、なんぢも生あるものぞかし。生あるものが生あるものを服しては、さて後の世を、なにと思ふぞ、鬼鹿毛よ。それはともあれかくもあれ。よしこの度は、一面目に、一馬場乗せてくれよかし。一馬場乗するものならば、鬼鹿毛死してのその後に、黄金御堂と寺を立て、さて鬼鹿毛が姿をば、真の漆で固めてに、馬をば馬頭観音と、いはふべし。牛は大日如来の化身なり。鬼鹿毛いかに

そして、この小栗の言葉を聞いた鬼鹿毛は、

人間は、見知り申さねど、鬼鹿毛は、小栗殿の額に、米といふ字が、三下りすわり、両眼に、瞳の四体ござあるを、確かに拝み申し、前ひぎをかつぱと折り、両眼より黄なる涙をこぼいたは、人間ならば乗れと言はぬばかりなり

という反応を示す。

ここで小栗は、「畜生の中での鬼」とも言うべき鬼鹿毛の、その異常さ——〈外部〉性——ではなく、むしろ、「生あるもの」という、小栗自身も含めたひとびとの共通点を重視している。そしてその「畜生の中での鬼」という評価が、「馬頭観音と、いはふ」ことへと反転する可能性を教えたのであり、それに応えるように、鬼鹿毛は小栗をその背に乗せるのである。

さらに、小栗は鬼鹿毛に乗るときにも、「かやうなる大剛の馬には、金覆輪は合わぬ」と言い、裸馬の鬼鹿毛にまたがって、「脾腹三寸に肉余つて、左右の面顔に、肉もなく、耳小さう分け入つて、八軸の御経を二巻取つて、きりきりと、巻きすゑたがごとくなり。両眼は、照る日月の燈明の、輝くがごとくなり」と、鬼鹿毛の力強い姿かたちをひたすらに褒めている。そしてその後、常人にはできない曲乗りを次々とくり出し、鬼鹿毛を見事に乗りこなしていくのであるが、鬼鹿毛のまばゆいばかりの体躯、そして尋常ならざる身体能力は、小栗がここで絶賛しているように、「生あるもの」にとつての憧憬の対象となるような、生命力にあふれたあり方であるとも見ることができよう。

人喰い馬・鬼鹿毛は、もともと、とてつもない剛力を持った荒くれ馬であり、ひとびとの手に負えない、いわば〈外部〉としての様相をおびていた。しかし、「生あるもの」としてのその生命力の横溢は、小栗のもとにあれば、その素晴らしい姿かたち、また、見事な曲乗りをこなす能力が、ひとびとの称賛の対象ともなるのであり、この話の最後、鬼鹿毛は小栗の言葉通り、馬頭観音として祀られることになる。

とすると、「大剛」とは、ときに〈内部〉の秩序からはずれるほどに、「生あるもの」としてのその生命力が横溢した状態のものを指していると考えられる。しかし、それが〈内部〉たる秩序の中にうまく位置づけば、それはまさに人知を超えた力・魅力を備えたものとして、尊崇の対象になるといふことである。

そして、鬼鹿毛同様「大剛」と言われる小栗の額に、人間の目には見えない、菩薩を意味する「米」の字や、常人とは異なる瞳の様子を見て取つて、鬼鹿毛は涙をこぼしていた。その小栗も、この話の最後では、「かほとまで真実で大剛の弓取りを、いさや神にはひこめ、末世の衆生に拜ませんがそのために」「美濃の国安八の郡墨股、たるひおなこと、神体は正八幡、荒人神」として祀られることになるのである。

#### 四

さて、鬼鹿毛に乗ることには成功した小栗だったが、照手の忠告を聞かずに横山殿による酒席に出席し、十人の殿原たちとともに毒酒を盛られ、地獄に落ちる。

ともに地獄に落ちた小栗と十人の殿原たちであったが、小栗が大悪人であるのに対し、十人の殿原たちは非法の死であるから人間界へ帰すと、閻魔大王は告げる。しかし、殿原たちは自分たちの代わりに小栗を帰してくれるように懇願し、殿原たちの遺体が火葬されていたのに対し、小栗の遺体だけが土葬されて残っていたこともあって、小栗が人間界にもどされることになる。

ここで殿原たちの懇願を聞いた閻魔大王は、「さてもなんぢらは、主に孝あるともがらや」と褒めており、ここでの殿原たちの行動は「孝」とされているが、小栗は再生後「十人の殿原たちの情けにより、黄泉帰りをつかまつり」と、その「孝」を「情け」として理解している。

だが、殿原たちは主人の命を助けようとしたのであるから、彼らの行動は「孝」と捉える方が妥当に思われるのであるが、小栗はなぜここで「孝」ではなく、「情け」という表現を使ったのであろうか。

殿原たちは、自分たちではなく、小栗を人間界にもどしてほしい理由を以下のように言う。

我ら十人の者どもが、娑婆へもどりて、本望遂げうは難いこと。あのお主の小栗殿を一人、御もどしあつてたまはるものならば、我らが本望までお遂げあらうは一定なり。

では、殿原たちの本望の内容とは、どのようなことであつたのだろうか。また、最終的に小栗は彼らの本望を達成したのであろうか。

ところで、この地獄の場面では、小栗に関する記述は皆無である。前半部ではその「大剛」をもって殿原たちを率いていた小栗だが、この場



面では、閻魔王と殿原たちのやりとりにただその運命を任せるしかない、まったくの無力な状態である。つまり前半部では「大剛」であった小栗は、地獄ではそれが失われた状態になり、そして人間界にもどった後半部で、ふたたびその「大剛」という性質をおびるようになるのである。

## 五

人間界にもどった小栗ではあったが、その姿は当初餓鬼のようであり、餓鬼阿弥陀仏という名をつけられる。閻魔王から小栗を託された藤沢の御聖人は、餓鬼阿弥の胸札に「この者を一引き引いたは千僧供養、二引き引いたは万僧供養」と書き、このことによって、小栗は土車に乗せられ、多くのひとびとの手によって藤沢から熊野まで引かれていった。そして熊野で入湯した小栗は、「一七日御入りあれば、両眼が明き、二七日御入りあれば、耳が聞え、三七日御入りあれば、はや物をお申しある」と、人間としてのあり方を取りもどしていき、最終的には「六尺二分、豊かなる元の小栗殿」になる。

それはつまり、先に見たように、その様子を見た熊野の権現が「あのような大剛の者に、金剛杖を買はずは、末世の衆生に買ふ者はあるまじ」と言うような「大剛の者」にふたたびなる、ということであった。

しかしその「大剛」とは、以前のような肉体的な力や武力の強さを指してはいない。鬼鹿毛に関して見たように、「大剛」とは、〈内部〉の秩序からはずれるほどに、「生あるもの」としてのその生命力が横溢した状態のものを指していた。そして同じ「大剛」という言葉で示されている以上、生まれ変わる前後ともに、小栗は生命力の横溢した存在である。一度は地獄に落ちながら、再度人間の姿を取りもどす小栗は、まさに生命力にあふれた「大剛」なる者と言える。

だが、申し子という生まれに由来する前半部の「大剛」は、七十二人もの妻嫌いや大蛇との姦通、無理矢理な婿入りなど、人間の世界に位置

づかないものであり、小栗は排除の対象となったが、小栗が一度は地獄に落ち、ふたたび人間に生まれ変わることで、その「大剛」は人間の世界に位置づくようになる。

そのような変化をもたらしたのは、土車に乗せられた小栗が、多くのひとびとの手によって引かれていったということである。生前とは違い、何もできない餓鬼阿弥としての小栗は、ひとびとの思いをかけられることによってはじめて、人間としての姿を取りもどすことができる。いわばひとびとの「情け」が小栗を小栗たらしめたのであり、十人の殿原たちの「孝」も、その意味で小栗にとっては「情け」にほかならないのである。

さて、一方の照手であるが、小栗を殺しておいて自分の子を殺さないのは都の外聞が悪いという理由で、父の横山は鬼王・鬼次兄弟に照手殺しを命じる。が、兄弟はいざとなると殺すことができず、照手を乗せた牢輿を海へと流した。ゆきとせが浦に流れついた照手は、漁父の太夫に助けられたが、太夫の留守中に姥が照手を燻そうとし、しかし照手は観音に守られ美しいままだったので、怒った姥は照手を商人に売った。ここから照手は遠々と売り渡されていき、美濃の国青墓の宿の君の長の手に渡って遊女勤めをするように命じられるが、これを拒否したために過酷な水仕事を強要されることになる。

小栗の死を聞いた照手は、鬼兄弟に対し、「浮き世にあれば思ひ増す。姫が末期を早めん」と、自らの死を望んだ。しかし鬼兄弟が殺しかねて照手の牢輿を流すと、「よき島に御上げあつてたまはれ」と観音に祈り、この後も自ら命を絶つ機会はいくらでもあったはずであるのに、そうはしない。漁父の太夫に助けられてからも、君の長の手に渡るまで、照手が発した言葉や照手の感情についてはまったく言及がない。照手はこの間ひたすら受け身である。物語前半部の照手の特徴として、主体性・積極性が感じられないことを述べたが、基本的にはその状態がずっと続いているのである。

それが一変するのは君の長の手に渡ってからであり、君の長との会話においては、照手の心情や考えが多く言及されている。そして照手は遊女勤めをせよという君の長に対し、「愚かなる長殿の御誼やな」と、断固として拒絶を示す。さらにこれが、小栗との再会後に小栗に対してもしっかりと意志を示し、最後の横山攻めを止めることへとつながっていくのである。

このような照手の劇的な変化は、遠々と売り渡されていった道行きの後に見られるようになるのであるが、そのように変化を遂げた照手がいる青墓にも餓鬼阿弥を乗せた土車が止まり、これを知った照手は君の長に暇を請い、途中の数日間、それが小栗だとは気づかず餓鬼阿弥を引くことになる。

このときに照手は、「心は物に狂はねど、姿を狂気にもてないで」土車を引く。小栗が餓鬼のような姿になっているのと同じときに、照手も物狂いの姿になっているのである。このことは、小栗と同じように、照手もこのとき大きく変化していることを象徴している。

ここでの照手の描写は、前半の照手の印象を一新するようなものである。

(君の長に土車を引きに行くことを許されて…論者註) 照手この由きこしめし、余りのことのうれしさに、徒やはだして走り出で、車の手繩にすがりつき、一引き引いては千僧供養、夫の小栗の御ためなり、二引き引いては万僧供養、これは十人の殿原たちのおためとて、よきに回向をなされてに、承れば自らは、なりと形がよいと聞くほどに、町屋・宿屋・関々で、あだ名取られてかなはじと、また長殿に駆けもどり、古き烏帽子を申し受け、さんの髪に結び付け、丈と等せの黒髪をさつと乱いて、面には油煙の墨をお塗りあり、さて召したる小袖をば、すそを肩へと召しないで、笹の葉にいで付け、心は物に狂はねど、姿を狂気にもてないで、『引けよ引けよ子

供ども、物に狂うて見せうぞ』と、娘が涙は垂井の宿。

ここでの照手の「狂気」の姿は、前半部の小栗の「不調」に通じるものである。

周りに対する配慮がまったくなく、〈内部〉に位置づかない小栗の「不調」は、その排除へとつながっていったが、反対にひたすら受け身で、積極性や主体性のようなものはほとんど感じられなかった照手も、小栗同様、周りのひとびとの関係を、自分の意志をもって、十分に生きたことはできていなかった。しかし、小栗が土車で引かれることとひとびとの「情け」を受け、あらたなあり方をはじめのに呼応するように、照手は、遠々と売り渡されていった道行きを経て、ひとびとの関係を生きることができるようになり、そしてここでは恐ろしいほどの積極性を見せるのであるが、それはいうならば、日光山の照る日月の申し子としての〈外部〉性を、照手が回復したということである。「狂気」の姿は、照手がかもとも持っていた〈外部〉性を象徴している。<sup>10</sup> いわば、照手も「大剛」としてのあり方を示しはじめるのである。

## 六

小栗が元の人間の姿にもどり、照手のもとをたずね、二人はめでたく結ばれる。小栗は八十三歳で大往生を遂げるが、その際、「神や仏一緒に集まらせたまひてに、かほどまで真実で大剛の弓取りを、いさや神にいはひこめ、末世の衆生に拝ませんがそのために、小栗殿をば、美濃の国安八の郡墨股、たるひおなことの、神体は正八幡、荒人神とおいはひある。同じく照手の姫をも、十八町下に、契り結ぶの神とおいはひある」と、小栗と照手は神として祀られることになる。

なぜこの二人はあらためて神として祀られるのか。

それは、彼らがその「大剛」と言われる生命力の横溢ゆえに、都の秩序におさまりきらない存在であるからこそ、人間たちと、その〈外部〉

——神仏——とをつなぐことができるからであろう。照手が「契り結ぶの神」とされるのも、人間と神仏の間を結ぶという役割ゆえであろうし、また、小栗を人間界にもどすことを願った殿原たちが言っていた「本望」とは、自分自身はむろん、一族をはじめとするあらゆるひとびとが神仏の加護を受けること——「所も繁盛、御代もめでたう、国も豊かに、めでたかりけり」ということだったのではなからうか。

そしてそのような「天地和合」は、小栗や照手という「大剛」なる者が、神仏とひとびとをつなぐこと、つまり、神仏の加護を安定してひとびとにもたらしてくれることによって、実現されるのである。

### 註

(1) 和辻哲郎「歌舞伎と操り浄瑠璃」(『和辻哲郎全集 第十六卷』岩波書店、一九六三所収)

(2) 折口信夫「餓鬼阿弥蘇生譚」「小栗外伝」(『折口信夫全集2』中央公論社、一九九五所収)、「小栗判官論の計画」(『折口信夫全集3』中央公論社、一九九五所収)

### 五所収)

(3) 西田耕三『生涯という物語世界―説経節―』世界思想社、一九九三

(4) 岩崎武夫『さんせう太夫考―中世の説経語り』平凡社、一九七三

(5) 鳥居明雄『をぐり―再生と救済の物語』ベリかん社、二〇一一

(6) 村上隆『小栗判官』試論(『倫理学紀要 第三輯』東京大学文学部、一九八六)

(7) 以下引用はすべて新潮古典集成『説経集』(新潮社、一九七七)所収「をぐり」による。

(8) レヴィ・ストロースは、未開社会において、ときに子どもがまったく意味を成さない固有な名や名無しで通っているのは、それがその社会への分類の準備段階と考えられているためであると言う。(『野生の思考』みすず書房、一九七六)

(9) 小栗が元服の際になぜか烏帽子親がつかず、八幡正八幡の承認で成人した

ことは、小栗の都における位置の難しさを象徴する出来事である。  
(10) 折口、村上等多くの先行研究において、この照手の姿は巫女として捉えられている。

(二〇一九年九月一〇日受稿)

---

## Thoughts of “Sekkyō”

Yukiko Ito

Department of Education, Kamakura Women’s University

### Abstract

This paper intends to clarify, through a reading of “Oguri”—one of the representative works of “Sekkyō”—why the main characters Oguri and Terute are revered as gods, as well as people’s thoughts about the world. Oguri, who is unconventional in many ways, can connect to the world that lies beyond the world of humans, that is, the world of *kami* (gods) and Buddha. As Oguri is perfectly positioned in the human world, people can believe in the peaceful harmony and prosperity associated with *kami* and Buddha.

Key words: “Sekkyō”, “Oguri”, *kami*, Buddha